

若越郷土研究

33の4

人間 雨森 信成 (一)

山下 英 一

はじめに

藩校明新館でルセーとグリフィスから英学の教えを受けた士族および僧侶の子弟のその後の生き方を知るのには興味の深いことだが、なかでもとくに英学を生かした生涯を送った生徒について知ることは意味があると思われる。ここでいう英学とは英語そのものを通して通じて西洋の学問を学ぶことである。明新館の生徒は英人ルセーから英語を、米人グリフィスからは化学、物理を学んだのだが、その一八七一年（明治四年）ごろには英学だけ

でなく独学、仏学など一般に洋学が自由に学べるような時代になりつつあった。開国の前の蘭学を通じての西洋理解から開国後の急速になだれこんできた西洋文明そのものとの接触の時代への変化は地方の青少年にも大きな思想の転換を迫るものであつたらう。

そういう多感な若者のなかに明新館の生徒、松原信成（後の雨森信成）がいた。雨森信成について拙著「グリフィスと福井」で一九七九年に書いたのが少くとも伝記的なものでは最初だと思ふが、その数年たつて雨森の家系の人たちやラフカディオ・ハーン（へるん、小泉八雲）の研究者などから拙文が話題になつてきた。また筆者自身、グリフィス・コレクションから雨森信成のグリフィス宛の手紙二通、未刊の論文一つ、などの資料を加える

ことができて、かなり雨森の生涯の歴史が分りかけてきた。しかし知られざる部分がまだいっぱいあるので、この際、これまでの資料から語れることを語って読者の方から新しい情報が寄せられれば幸甚と思ふ次第である。

一、雨森信成年譜（参考事項を含む）

一八五八年（安政五）

福井藩士松原十郎（義成・中級武士）の二男に生れる。兄は秀成、弟は元成。

一八七一年（明治四）

藩校明新館でルセー（Alfred Lucy）¹、グリフィス（William Elliot Griffis）に習う。

へあの頃の私は痩せていて、青白い顔の身体の弱そうな少年（グリフィス宛の雨森の手紙一九〇四・一二・二二）、へ粕谷、牧田、松原、野村、山村らが別れのあいさつに来た。彼等は横浜へ行く（グリフィス日記一八七一・九・一〇）²。廃藩置県の詔書出る（七・一四）。ルセー福井を去る（六月）。

一八七二年（明治五）

米人宣教師ブラウン（Samuel R. Brown）に横浜で学ぶ。へブラウン博士夫妻の写真とグリフィスの写真を座右に置く（グリフィス宛雨森の手紙一九〇四・一二・二二）³。米人ワイコフ（M. N. Wyckoff、明新館改め第二十八番中学の理化学教師でラトガース・カレッジでグリフィスの後輩）の通訳と

して福井に赴任。グリフィス福井を去り大
学南校の理化学教師として東京へ出る（一
・二二）。

一八七三年（明治六）

雨森家の養子に迎えられる。松原十郎の
弟雨森右膳（上級武士）と妻ちかの娘芳の
養子であった胖が死亡したためである。

〈中学で一番正確な英語を話す〉（グリフ
イス宛のワイコフの手紙）〈G. F. Barker
の化学part Iの翻訳〉（ワイコフの手紙）
福井市立図書館蔵（*A Manual of Inorganic
Chemistry* by C. W. Eliot & T. H. Storer
（足羽県学校蔵印）にBegan from 15th Oct.
1873. N. Amenomoriと雨森自筆のサインが
ある。

一八七四年（明治七）

文部省令によるワイコフの新潟英語学校
赴任に同行。パーム（T. A. Palm エジン
バラ医療宣教会派遣の宣教医師）の通訳兼
助手になる。真宗王国新潟での伝道は困難
で身辺は危険をきわめる。パームの「偶像
非神論」の訳者は雨森と思われる。数か月後、
横浜へ出てブラウン塾に入る。聖書之抄書

に奥野昌綱（プロテスタントの日本人最初
の牧師）と讃美歌「世界よよろこべな」、
「うみにひびかせ」を共訳。

一八七五年（明治八）

義母ちかにヤソ信者と呼ばれて気に入れ
られず、芳と別れる。しかし義母（叔母）
に対して孝行の意味で雨森姓を継ぐ。芳は
信成の弟元成と結婚。メリー・キダーの学
校（後のフェリス女学院）の教師になる。
グリフィスの帰国（七月）。

一八七七年（明治一〇）

築地の東京一致神学校（明治学院に合流）
の開校と同時に神学生二四名の一人として
入学。

一八七八年（明治一一）〜一八八〇年（明治
一三）

日本基督一致教会の第二回中会で神学生
一三名と准允免状を受ける。植村正久（牧
師、神学者）と上州へ、本多庸一（日本メ
ソジスト教会初代監督）と上総房州へ伝道
活動。

一八八一年（明治一四）〜一八八七年（明治
二〇）

ワイコフの先志学校（明治学院に合流）

で教える。〈雨森という発刺たる才智と深
遠なる学識と強烈なる信仰を有する先生が
学監として生徒と寢食を共にされた。〉（英
学者、村井知至）海外遍歴に出る。朝鮮、
中国、パリ、ロンドン、米国。〈キリスト
教が西洋の道徳に及ぼす影響を実際に見た
くてヨーロッパを訪問……現在の政策に敵
対するような意見を公表して政府の怒りを
買い、新しい思想の刺戟を受けて無分別な
他人のような思いで国を離れて行かねばな
らなかつた—exile。〉（ハーンの「心」の
A Conservative から）帰国後〈微力社
を組織して三、〇〇〇人の無産士族と岡山
県児島湾奥浦で開拓事業を始める。三つの
商社を経営。〉（明治学院百年史、一九七八
年）

一八八八年（明治二一）〜一九〇二年（明治
三五）

「明治会叢書」（佐々木高行ら欧化主義に
対抗する人たちの設立した明治会の機関雑
誌）の編集および論文発表。〈新聞の編集。
印刷業、朝鮮王の相談役〉（グリフィス宛

の手紙一九〇四・二二・二二)

ラフカディオ・ハーン(四〇歳)の来日。島根県尋常中学校英語教師になる。(一八九〇年)日清戦争。(一八九四―九五年)

一九〇三年(明治三六)

福井を訪ねる。横浜元町千軒山に妻錦(旧姓田辺)と住む。横浜のグランドホテルのクリーニング業。孤児(男一、女二)を養育。

一九〇四年(明治三七)

友人らと日本の採鉱資源(越後の鉱山)を開発して日露戦争(一九〇四―五)の軍費を助ける。ハーンの死。数日後に仏式で葬儀が行われた。その日横浜から二人の弔問客があった。ハーンの親友マクドナルドと深い学識とハーンの日本研究を助けた雨森信成である。(森亮「ラフカディオ・ハーンと日本の心」一九七四) *The Japanese Spirit to The Atlantic Monthly* 誌(Houghton, Mifflin & Co. 4 Park Street, Boston)に発表。

The Grand Hotel, Ltd. Guide Book for Yokohama and Immediate Vicinity を出版。

山下 人間(雨森信成)

一九〇五年(明治三八)

Lafadio Hearn, The Man to The Atlantic Monthly に発表。

War and The Japanese Women を執筆したが、未発表のまま、グリフィスの手許に残る(絶筆)。

一九〇六年(明治三九)

死亡。父は内科医でしたので雨森が死去する前に腫物が次ぎ次ぎに出来て切開した傷跡が身体中にあつたと、錦さんが云っていたので恐らく糖尿病だったのではないかと云っていました。(父が信成の甥にあたる熊取正光氏の手紙)。(雨森信成 英学明治三九年三月一日没 根岸町相沢墓地 能楽・和歌にも通じた。(横浜市史稿)



「英隆院殿信成實道清居士」は英学に堪能であつたこと(英隆)と身分の高い人または資産家であつたこと(院殿)を物語っている。近くに菩提寺高野山別院増徳院がある。雨森信成、錦の養女さよは雨森元成、芳の長男理之と結婚したが一九二三年(大正一二)の関東大震災でさよと二男・三男は死亡。錦は震災の一、二年後に病没したという。(雨森元成の子孫池辺菜さん作成の系図による)。

なお松原家の墓は福井市の曹洞宗鎮徳寺、雨森家の墓は福井市の曹洞宗泰清院にあることも付記しておきたい。

二、雨森の英文手紙

この年譜で分かるように雨森信成については、空白の部分が非常に多いことで不完全の非難はまぬがれないが、致し方がない。しかしグリフィス・コレクションの雨森のグリフィス宛の二通の手紙はさいわいにも雨森を知る大きな手がかりであつたので、まずここにこれらの手紙を拙訳で紹介しよう。

(手紙 その一)

親愛なるグリフィス博士 一九四・三・三

なつかしい先生からお便りをいただいた私のよろこびは先生のご想像以上です。アトランティック誌の人を通して送って下さったあのお便りは一昨日とどきました。そうです。私はあの頃の瘦せていて、青白い顔の身体の弱そうな少年です。私は福井で先生の化学の講義を受けたり、先生の午後の散歩のお供をいたしました。お手紙と、特に先生のお写真で私はあの頃のことを思い出しました。あの頃の私は松原と呼ばれていました。その後、叔父（私の母の義理の弟で後継ぎがなく死亡）の家の養子になりました。そして雨森姓を名のり、その財産を引き継ぎました。けれども間もなく、私は隠居の身となり勘当されました。しかし雨森の名前はそのまま、残しました。そうすることで叔母（二、三年前に亡くなりましたが）への孝行ができると思つたからで、もしこの手紙が自分のことばかりになりがちでしたらお許し下さい。しかし私のことを書いてほしいと云われますのでそうします。私はこれまで波瀾に富んだ人生を

送ってきました。ところでここだけの話ですが、なつかしい先生なので申しあげます。おそらくよろこんでいただけるでしょうが、私は友人の故ラフカディオ・ハーンの「心」（これは私に捧げられた）の中の論文 *Conservative* の本人なのです。この中でハーンが話している英国人の先生はアルフレッド・ルサー先生で、きつと憶えていらつしやると思います。もちろん、ハーンなりに話の大意を潤色しています。それはご承知のように出来事を理想化するためですが、大体のところこの論文はある時期までの私の人生の歴史を物語っています。さて私はあの時以来、学校の教師や、ある事業会社の発起人になったり、サムライ三、〇〇人と広大な土地の開墾の仕事をしました。三つの商社の経営、新聞の編集、印刷業、朝鮮王の相談役として *Legendre and Greathouse* に協力、西洋思想を吸収する一方、大和魂を守る、つまり西洋文明をもつて日本文明を強化する協会を組織する仕事などをしてきました。

私は結婚しています。しかし子供があり

ません。けれども三人の孤児（男子一人、女子二人）を育てました。男の子はもう青年になって正貨銀行の上海支店の行員です。長女は結婚しています。二女は私ら夫婦と住んでいます。その上、私は甥二人と姪一人を学校にやっています。このように自分の子供がなくても、その代りを他人の子供がちゃんとうめあわせてくれます。

私は今、この戦争の軍備に寄付するために友人たちとこの国の採鉱資源を開発する仕事をしています。私は人の喜ぶ顔が好きです。懸命な仕事にもかかわらず私は貧しいですが、このうれしそうな顔を見ると、どんなに富める人もうらやましいとは思いません。さらに私は懸命に働らいています。本当の何でも屋です。何でもして稼げるだけ稼げます。というのも私は五人の友人の家族の面倒を見なければなりません。友人たちは今、満州で戦っているのです。ずうずうしくはなくても、差し出がましいとお思ひになったら許していただきたいのですが、何か私に出来る文筆の仕事がありません。私のことを思い出して下さいますよ

うお願いいたします。

先生のお写真とアトラティック誌の私の記事のご高評をどうもありがとうございます。お写真は額縁に入れて、もう一人のなつかしいS・R・ブラウン博士と奥様のお写真と並べて私の部屋に置きます。先生は私の記事を「大和魂の讃辞(a tribute)」と心よく呼んで下さいました。先生、意味は違いますが、それは実際に贈物(a tribute)でした。といいますが、原稿の謝礼金の三分の二は私の友人たちの家族へ、残りの三分の一は毛布などを買ってこの友人たちへ送ったからです。

ご都合のよい時にお便りを下さい。すぐご返事をいたしますのでご安心下さい。また奥様とお子様によくお伝え下さい。まだ皆様にお会いする光栄に浴しておりますが。

では先生と皆様へよろしく。また先生のお手紙とお写真と、この戦争でわが国の勝利をせつに望んで下さるお気持ちに心から感謝を申し上げます。

敬具

山下 人間 雨森信成(一)

雨森 信成

日本、横浜、元町、千軒山
追伸。この手紙といっしょに投函するもう一つの封筒に私の写真があります。

(注)手紙その一は雨森が四六歳。グリフィスは六〇歳を越えたところで、牧師を辞めて文筆生活に入っていた。グリフィスの明新館の生徒、松原信成が横浜へ出て行くのが一八七一年九月一〇日のことだから、グリフィスとは三〇年ぶりの手紙のやりとりになる。そのきっかけは雨森の論文 *The Japanese Spirit* を読んで感銘したからで、手紙と同時に自分のポートレート写真の交換もしている。なお手紙により雨森の明治会への考へ方は単なる欧化主義批判でなく西洋文明の日本化であったことも分かる。

(手紙 その二)

親愛なる博士

一九五四年三月

もっと早くお便りして、ご著書 *Sunny Memories* のご惠贈と、一月一七日付のお手紙の親切なお言葉に感謝すべきであったことを幾重にもおわび申し上げます。私は越後の釜山に行っていて、横浜を留守にし、

最近もどったばかりです。

一昨日、*Sunny Memories* を読了しました。大へん面白くて、まるで先生のおそばに坐って魂の救済のために努力なさった先生の立派なお話を聞いているような気がしました。福井と東京で聞いた先生のお声をよく覚えています。その記憶がご本のかなかに一語一語に生彩を与え、先生のお口からじかに伝わってくるようでした。

インディペンデント紙の編集者にご親切に手紙で私のために原稿依頼のお世話をし下さって心から感謝を申し上げます。まだ何もいってきませんが、先生のおかげで何かきつとよい結果が生まれるでしょう。

さて、先生のお手紙の質問にお答えします。笠原は神戸のある会社の事務に雇われているそうです。出浦は弁護士になって東京と横浜で事務所を開業しています。彼は他人の不和の調停に全身全霊を捧げています。Tom, Johan と宮崎についてはどうなったか知りません。岩淵と村田は数年前に亡くなったと聞いています。D.P. Palm について数年前の最後のニュースは

彼は帰国したということです。ルセー先生について最後に聞いたのは、彼は日本の北部で農場主になっているということです。

「大名の若い息子、松平」は父の後を継いで、今は子爵です。彼はすぐれた貴族院議員で、執拗に顔のひげはそらず、髪は切らずにおくので有名です。英国の農科大学を卒業しているので、福井の家で外国の実なる草木を栽培したり、日本の実なる草木を改良したりして実験をしています。

国会が開かれると上京します。またセイヨウヒルガオ栽培の最良の方法について苦心の調査をしています。家の庭ではすばらしいメロン、キュウリ、リンゴ、ナスなどいろいろ栽培して、それを多量に金銭と引換えに福井の人に提供しています。彼は哲学者です。またスマイルズの弟子です。ですから自助力の全くない近くの貧しい人達に、

Self-Help を教えています。

私は一昨年、福井へ行きました。町のなかにはずいぶん変化した所もありました。先生とルセー先生が住んでおられた家のあった場所は商店街に変わっています。二軒の

異人館の一軒はだいぶ前に焼失し、もう一軒（先生がお住居だったと思いますが）はレストランに変わっていて、薄くて堅い皮のようなビフテキが咀嚼力を試すために供されま

す。先生のおっしゃる東洋と西洋の両文明の不完全性は全く真実です。完成に到達するには双方が互いに必要であると信じてますが、それだけでなく一歩進めて考えますと、この両者が一つに統一された時でも結果は完成にほど遠いと思います。もし人間自身が完全にならなければ、人間の文明は未完成のままです。というのは真の文明は人間の完成に他ならないからです。不徳と徳が天の下で未知になる時が来るまで、世界はその最初からしてきたと同じ様に呻き苦しみ続けるでしょう。

私は先生の *Life of Dr. Brown* の一とを読みましたが、まだ読む光栄に浴していません。その出版社が分らないのと、それを持っている友人もいないので、注文も借りることも出来なかつたのです。

ラフカディオ・ハーンについての論文を

書いてアトランティック誌へ送りました。そこからは論文を受理したので、その月刊誌の早い号に掲載すると書いてきました。

ところでこの郵便といっしょにもう一つの論文をアトランティック誌へ送りました。

War and the Japanese Women という

論文です。これは日本についての大低の本にあるのは全く違った日本女性の姿を描いています。またベーコン女史がホートン・ミフリン社から出版した本でも触れていない部分を扱っています。そこでアトランティック誌の人に手紙で、もしその月刊誌にこの論文を発表したくない場合は、先生のところへ転送してほしいと書きました。

私の頼みを聞いていただけるものなら、先生からインディペンデント紙かどこかの新聞または月刊誌で適当と判断されるところへの掲載をお願いできませんか。条件については、その発表に同意してくれる人の公正な判断にまかせます。このように私はまだ、何かしてほしいといつも嘆願して先生を困らす生徒であります。

もしこちらで何かしてほしいと思われる

WAR AND THE JAPANESE WOMEN

BY NOBUSHIGE AMENOMORI.

Some days since when travelling on the Tokaido I noticed as the train neared Hiratsuka a throng of people with banners and streamers and led by a company of youngsters who played music, wending their way through the paddy-fields towards the station. I knew it was the villagers coming to bid farewell to some soldier called to the front of the war. By the time the train halted, the station was full of people. Presently an ensign in uniform appeared on the platform. He was followed by an old lady, apparently his mother, a young woman leading a boy who had a little paper flag in his hand, and a

(注) この論文はラトガース大学のグリフィス・コレクションに残っていたもので、次号の五「愛国者、雨森信成」で内容を解説する。

ことがあれば、私はいつも先生のお役に立つことを忘れないで下さい。

やさしい先生に心からの感謝とごきげんよろしくを申し上げます、

敬具

雨森 信成

日本、横浜、元町、千軒山

(注) *Sunny Memories* は一九〇三年刊のグリフィスがステネクタデー、ボストン、イサカの各教会の牧師であった時の説教集である。また、*Life of Dr. Brown* はグリフィス著 *A Maker of the New Orient, Samuel Robbins Brown, Pioneer Educator in China, America and Japan, The Story of His Life and Work* (一九〇二) のことである。ハーンに関する論文は雨森 *Lafcadio Hearn, The Man* (一九〇五) のことである。この論文は雨森の名を不朽にしたと云えよう。この手紙では文明の完成は人間の完成なくしてはありえないという雨森の達観が特色だろう。この両者の完成と融合が雨森の明治会の理想であった。